

大会名称: 高松宮記念杯 第50回全日本実業団バスケットボール選手権大会

開催場所: 大阪市中央体育館メインアリーナ Bコート

試合区分: No. 82 男子 決勝

期 日: 2018(H30)年2月13日(火)

主審: 針生 淳男

開始時間: 13:30

副審: 黒岡 和哲 : 茅野 修司

日本無線		○		15 - 18		●		曙ブレーキ工業							
(関東1)		71		22 - 11		57		(関東5)							
				15 - 11											
				19 - 17											
				-											
				-											
				-											
NO.	S	選手名	PTS	3P	2P	FT	F	NO.	S	選手名	PTS	3P	2P	FT	F
1	*	福田 大佑	11	0	5	1	1	0	*	占部 賢人	18	4	2	2	2
2	*	福田 侑介	7	1	2	0	2	1		坪田 悦正	-	-	-	-	-
3		藤井 祐	-	-	-	-	-	5	*	山本 大貴	8	0	4	0	3
5		山岸 玲太	4	0	2	0	3	8	*	佐々木 陽	7	1	2	0	3
6	*	鈴木 伸之	9	1	3	0	1	9		北野 哲平	-	-	-	-	-
7		劉 孟濤	17	1	7	0	1	10		荒木 直	-	-	-	-	-
9	*	小林 純也	14	2	4	0	1	13		石ヶ守 遼	3	1	0	0	0
15		近藤 大	0	0	0	0	1	14	*	吉本 健人	7	0	3	1	1
18		深江 龍翼	-	-	-	-	-	20		熊谷 弥高	-	-	-	-	-
19		三原 大樹	0	0	0	0	1	27		舟越 徹	4	0	2	0	2
21		石黒 岳	9	1	3	0	0	71		内藤 達也	-	-	-	-	-
27		有田 拓矢	-	-	-	-	-	87	*	河本 裕一	6	0	3	0	0
31	*	那谷 一樹	0	0	0	0	1	91		張 晔博	4	0	2	0	2
34		樋渡 大樹	0	0	0	0	0								
コーチ 林田 亮 / TEAM								コーチ 石井 孝生 / TEAM							
合計			71	6	26	1	12	合計			57	6	18	3	13

S: スターター PTS: ポイント 3P: 3ポイントシュート 2P: 2ポイントシュート FT: フリースロー F: ファール

4年連続の決勝進出で3年振りの優勝を目指す日本無線と5年振りの決勝進出の曙ブレーキ工業との戦い。

1P

日本無線#1, 2, 6, 9, 31 曙ブレーキ工業#0, 5, 8, 14, 87でスタート。日本無線が#1を中心に攻撃を組み立て加点し、一方曙ブレーキもディフェンスリバウンドをしっかりと取り攻撃につなげて対抗する。一進一退が続く。残り3分を切ったところで両チームとも選手交代でリズムを掴もうと手を打ったところで、曙ブレーキに流れが向き、一気に逆転し、15対18の曙ブレーキの3点リードで1Pを終了する。

2P

このピリオドに入っても曙ブレーキは#0の3ポイントなどで主導権を握りながらゲームを進め、残り7分切ったところでは20-27とリードを広げる。ここで日本無線は#9の連続3ポイントで26対27の1点差にまで詰め寄り、その後#7の速攻で逆転に成功。曙ブレーキも立て直しを図るが、なかなか得点に結びつかない。日本無線が残り2分で35対29と点差を6点にしたところで、曙ブレーキはたまたまタイムアウトを取る。その後はどちらもなかなか得点に結びつかず、37対29の日本無線8点リードで折り返す。

3P

日本無線は連続2ポイントで一気に加点し、点差を12点にまで広げる。曙ブレーキも連続2ポイントで応戦するも、日本無線は#7のインサイドなどでリズムを握り、残り5分には48対33と15点差にまで広げ、曙ブレーキはタイムアウトを取り、ディフェンスを立て直す。その後点差を縮め、8点差までなると今度は日本無線がタイムアウトを取って、立て直しを図る。その後は両チームともにディフェンスの頑張りが目立ち、52対40の日本無線の12点リードで3ピリオドを終了する。

4P

このピリオドに入っても両チームともなかなか相手のディフェンスを切り崩せず、リズムをつかめない。曙ブレーキは#0の3ポイントで、かたや日本無線は#2の3ポイントで応酬し、13点差のまま攻防が続く。残り6分を切ったところでタイムアウトを要求し、局面の打開を図る。その後、曙ブレーキはディフェンスの頑張り得点を許さないが得点がなかなか伸びない。逆にここで日本無線はタイムアウトをとり、オフENSEの指示を切り替え、連続加点で残り2分過ぎには点差を62対52の17点差にまで広げた。その後は日本無線はゲームをコントロールし、71対57で日本無線が優勝を遂げた。

一般社団法人 日本実業団バスケットボール連盟

